

難燃衣料と防災

服飾デザイナー

森 南海子

新しいかたち、新しい色、しゃれた柄など、視覚に訴える衣服に夢中だった時代から、「素材」をもとめる時代への移行が感じられる。

素材は目に見えない分だけ厚み”を持っているし、安全や予防といった意味を宿している。難燃素材のほかにUVと呼ばれている紫外線よけの素材も開発されて、それらは単に美容のために紫外線を遮断するにとどまらず、皮膚疾患を持つ人々への助けともなろうとしている。

実にさまざまな分野で繊維は新しい時代を築こうとしている。

今年1月、大阪梅田のホテル阪神地下一階の店のショーウィンドウ天井から発火した火事に際しても、私の店に飾り付けられていた難燃セーイの割烹着やジャンパースカートとスモックの一群がショーウィンドウと店内を間仕切る場所に吊るされていたため、店内への延焼を食い止めた。衣服はどれも前身頃、後身頃、見返しといった布が重なり合っていて、二重、三重のカーテンの役割を果たした。この間仕切りが、もし一枚のカーテンであったら被害は、はたしてこんなに小さかっただろうか。容易に火がつかなくても、一枚のカーテンであったら被害は大きくなっていただけない。壁面に向け

てあった一枚のカーテン部分は、壁面への焦げ目がはっきりついていて。となれば、防災カーテンは一重の布では決して安心できない。また問題なのはその布のもつ「特性」であり性能である。

難燃や防災という言葉は、たやすく使われているが、その内容についての知識や、実験はまだまだこれからの段階にある。

衣類に関しては、軽くて、色がよくて、風合いのよいものが要求されてるが、室内での防災対策には必ずしも衣服と同じ条件のものがよいとは限らない。

火に対しての危険や恐怖感をどれだけの人が持っているだろうか。大半の人は、老人も含めて私は大丈夫だと思っているにちがいない。私だってそのひとりだった。しかし、母も高齢で台所に立つときの手元が安全とはいいがたくなった。

火に弱い布と強い布があるということを知って興味を持った。火に強いというか容易に火のつかない布、もし火がついたとしても火元から離れると鎮まる繊維が、実は身近にあったことに長らく気づかなかったことが悔やまれた。

20年も前ぐらいから、この燃えにくい繊維の開発は始まっていたのだが、消防服やカーレーサー用など特殊なものとして、私

たちの日常生活には入ってこないままであったのだ。

私が、難燃の生地を探しているのを知ったメーカーの人たちは、2m、3m、ときには50cmといった小布までを私の店に持ち込まれた。大手メーカーはそれぞれが競争相手のはずだが、私の店でバッタリ出合って、そこで話が始まり、名刺が交換され、私を囲んでお茶を飲み重ねるうちに、一度みんなで会って難燃の繊維をあれこれ話し合ってみたらどうだろうかという話になった。

今日までの苦労話が土台になって、これからの高齢化にそなえとなると、いままでのような特殊な衣料という考えも捨てなきゃならないのでは……ということになり、私がA社とB社の布を袖口と身頃に使って一枚のエプロンが仕上がる、といった共同作業が始まって行く。こうして自然発生的に難燃の会は、はじめは個人個人で知り合い、それが会社ぐるみの集いにと拡かっていった。それは何とも自然な成り行きであった。「わが社」などという枠を超えて高齢化社会への対応が進んで行ったのだ。

その集まりも、やがて一年を迎えようとしている。

私は燃えない繊維の学習から始めた。

ガラス繊維、アラミド繊維、そしてカネカロン、カインールなどといった繊維は火に対して強いこと、また、アクリルやポリエステルといった合繊にも難燃の加工ができること、綿は燃えやすいがウールは燃えにくいことなど常識とわかっていいことの再認識からスタートした。

薄ものよりも厚地のもの、さらに刺し子で重いぐらいに仕上げられたものは容易に

火を通さないことを確かめながら手さぐりであった。

また、衣服は手首のところから火がつきやすいことを知ると、アームカバー作りに無中になった。たかがアームカバーなのだが、実際に作り始めると、長さや太さのほんのちょっとしたところでとまどった。

袖口にゴムを入れるとして、それは1本なのか2本なのか、そしてゴムの幅や長さほどのサイズが楽にはめ続けられるのか、などで悩んだ。

それに、その難燃繊維も縫い合わせるとき滑りやすいなど、縫製上のことでもつまずいた。

しかし、衣服の袖口や裾などに火がつくと、火元から逃れても途中で消すことはほとんど困難だとわかると、なんとか袖口で火を止めねばとあせった。

古来、日本の消防士は何枚もの布を重ね合わせた上に刺し子をした分厚い衣服を着用したが、布の厚みという点でいえば、難燃性能は布の厚みともかかわり合っている。1枚の薄いものより、2枚、3枚と分厚くなったもののほうが、火に対して強い。また難燃の衣料は、綿（わた）の段階から不燃性能を持つもの、あとから加工によって難燃性をもたせるものなどさまざまである。また、どんな状態で燃えくすぶるか、火をくぐったあとの状態についての知識も必要である。

そのためには、使用する布を、それが衣服であれ、カーテンであれ、アームカバーであれ、一度燃焼の状態を自分の目で確かめてみる必要がある。炭化するもの、熔融するものなどその布がもつ特性を知ることが大切である。

難燃ということは不燃とは異なる。そのことへの認識がなくては危険でさえあることも忘れてはならない。

しかし現実にはまだ難燃繊維そのものに

ついでに認識が少なすぎる。

ひとまず一人でも多くのひとが難燃繊維を手にとってくれることを願う。